140周年特集

三回忌に寄せて

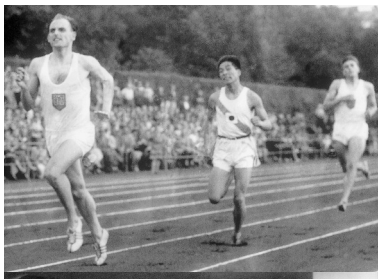
初の母校五輪代表選手 陸上・鈴木重晴さんをしのぶ

かつて母校からオリンピック選手が誕生し、その活躍ぶりに日本中が沸き返ったことをご存じだろうか。

時代は「もはや戦後ではない」が流行語となった57年前の昭和31年にさかのぼる。メルボルンオリンピックの陸上競技男子800mと1600mリレーに日本代表として出場した鈴木重晴さん（昭和27卒）がその人である。抜群のスピードでトラックを駆け抜ける名スプリンターとして鳴らし、その後指導者としても輝かしい実績を積み上げた鈴木さんの存在は母校の誇りであり、わが国中長距離スポーツの歴史を語るうえで忘れてはならない人物である。

あれから半世紀以上、母校から鈴木さんに続く五輪代表選手は生まれていない。

鈴木さんは晩年闘病生活を送りながら後輩の指導に心を砕いたが昨年2月27日、脳梗塞のため78歳で鬼籍に入った。来年2月の三回忌を前に、陸上競技部の後輩お2人にありし日の鈴木さんを回想していただいた。



〔上〕日独米国際陸上800mで日本新記録を樹立（昭和30年、西独カッセル；中央が鈴木氏）

〔下〕昭和31年、メルボルン五輪日本代表に選ばれる（前列右が鈴木氏）

黒光りする足の見事な美しさ

陸上競技部OB　長野　佳司（昭和29卒）

昭和26年4月、私は新制高校として秋田中学から改称した秋田南高校に入学した。中学3年の時の全県中学陸上砲丸投で3位だったので、陸上競技部に入部を申し入れたところ、「5月の中央地区大会の成績を見てから」との返事が返ってきてびっくりした。結局、同大会で私は砲丸投・円盤投・槍投の3種目とも1位になり入部が許された。

3年生は短距離の武田孝男さん、中長距離の鈴木重晴さんに相沢進さんの3人、2年生も4、5人しかいなかったのに新入部員は9人であった。顧問の先生がグラウンドに来ることもなくコーチもいなかったので練習内容は先輩たちが作った。練習場所は新装なった公認県営陸上競技場（現在の秋田大学グラウンド）で、駅前校舎から歩いて通っていた。そこは他校の陸上競技部のほか母校ラグビー部の練習場所でもあり、各校各部が入り乱れていつも活気にあふれていた。

後に鈴木先輩がOB会報に寄せた一文には、当時の練習について旧17連隊兵舎の建物を使っての合宿は快適ではなかったが実に楽しいものであったこと、長靴を履いて雪道の町の中を走り回る冬期間の持久力強化練習はきつかったが、以後の足腰の強化には非常に有効であったことなどが書き記されていた。

武田・鈴木の両先輩の練習は、既に全県トップの位置にいたのでさらに前進するためとことん自分を鍛えぬく毎日で、終わってからの足もみは新入生の役目だった。その中でも鈴木先輩の足の美しさは見事なものだった。たっぷり走った後のふくらはぎの筋肉は、手で触ってみてもそれと分からないほど柔らかく弾力があり、その色はチョコレート色でまさに黒光りしていた。いったん走り出すと流れるような足運びと蹴りでスピードを上げていく見事なストライド走法で、サラブレッドさながらの走りだった。わずか1年のお付き合いではあったが、以後先輩の名声が高まるにつれ、一緒に練習した後の足もみを自慢できることは後輩として鼻高々であった。

鈴木先輩は戦後の新教育制度（六三三制）に変わる直前の昭和21年、秋田南高校併設中学に入学、野球部に所属していたが高1の5月、名物の新屋大橋折り返し全校マラソンで敗れた悔しさから陸上に転向した。短距離から長距離まで何でもこなすオールマイティだったが、その才能が一気に花開いたのは3年生の時であった。400mと800mで全県・東北大会ともに優勝、夏のインターハイでは両種目とも3位入賞、秋の東西対抗400mで初めて全国優勝した。

卒業後は先輩の国体400m優勝者高橋慶治氏（昭和16卒）の助言で早稲田大学に進学し競走部に入部した。早稲田進学後は在学中の4年間に中距離4種目（400m、800m、1000m、1600mリレー）で日本新記録を樹立するなどめざましい活躍を見せた。このうち800mの1分51秒8の記録は3年時の昭和30年、ドイツのカッセルで行われた日独米国際陸上でたたきだしたものだ。これらの成績が評価されて鈴木先輩は翌昭和31年のメルボルンオリンピック日本代表に選ばれた。オリンピックでは得意の800mと1600mリレー（4×400m）に出場、